

特別会員寄稿

初春の行事など

市民大学日本の芸能 担当講師
松本 雍

みなさんは、「年越しそば」をいつ召し上がりますか？ テレビのニュースでは大晦日の昼から名題そば屋さんの盛況ぶりが伝えられますが、我が家ではテレビの「ゆく年くる年」を見ながら食べるのが習わしなので、「あれッ昼に食べてもよいの？」と不思議に思っていました。大人になって調べてみると、いつ食べても良いらしく、地域によっては元日や小正月に食べる場所もあるそうです。また、妻の家では、大晦日の夕飯（スキ焼きが多かったそうです）にできたばかりのお節料理を添えるのが通例で、それを「お年取り」と呼んでいました。我が家でも子供へのお年玉を添えて踏襲していました。また初詣も、除夜の鐘を聴きながら山門が開くのを待つ人もありますが、我が家のように御屠蘇を済ませてからゆっくり出かける人も多くいらっしゃるようです。

このように地域や家々によってさまざまな新年の迎え方や行事があるようですが、能の世界でも新春の特別行事があります。普段は出ない＜翁＞という曲を演じるのです。「翁は能であって能でない」と言われるように、能が生まれる以前から演じられていた古い芸能で、とくにストーリーもなく、「天下泰平、国土安穩、今日のご祈祷なり」という詞章があるように祈りの曲です。現在では一年の初めの演奏会などでしか演じられませんが、江戸時代は必ず一日の最初に演じられたもので、役者は精進潔斎して舞台に臨んでいました。現在でも流儀によって翁の出演者は別火をするなど、大切に扱っています。また、＜翁＞に限って小鼓は三人になるほか、大鼓は三番叟になってから参加する（太鼓は加わりません）など、常の能とは異なる点が多々あります。ご覧になる機会も少ないので少し説明したいと思います。

このように＜翁＞では足拍子を踏むことが大切な要素になっていますが、それについて思い出されるのが山形県黒川能の「大地踏み」です。黒川能は櫛引町の人々が江戸時代から守り続けてきた芸能ですが、その初めに幼い子供が刀を担げて足拍子を踏みながら舞台を一巡するのです。これは千歳舞と同じく邪気を払い舞台を清めることを、より端的に示していると思います。雪深い里で夜を徹して演じられる黒川能は魅力にあふれており、一度ぜひご覧になることをお勧めします。

＜翁＞は全体が大きく三部に分かれます。幕が上がると、翁面と鈴などを収めた面箱を捧げ持つ若者を先

頭に、翁役者、三番叟役者、囃子役者、地謡役者と全員が行列を作って登場します。祭の庭に役者たちが入ってくる形で、翁役者は舞台正面先で膝をついて深々と一礼しますが、これは祭の庭に勧請した神様への礼なのです。小鼓が打ち出すと、翁役が「どうどうたりたりら」という擬音的な呪歌を誦いだし、地謡が続きます。ここまでが第一段で、全体の総序というべき部分です。第二段は白き翁の祝福という部分で、まず「千歳」と呼ばれる若者が颯爽と舞を舞います。千歳とは千年を経たという意味で、永遠の若さを保った者が勢いよく舞い、力強く足拍子を踏んで邪気を払い、舞台を清めるのです。この間に翁役者は白式尉の面をつけ、先ほどの「天下泰平」という祝言を述べ、静かに舞いだし、舞台の三か所（流派によっては二か所）で「天地人の拍子」と呼ばれる足拍子を踏みます。終わると翁役者は翁面を面箱に戻し、千歳とともに幕に入ります。第三段は黒き翁の祝福です。大鼓の激しい連打にのって三番叟が登場し、力強く足拍子を踏みながら舞台を回る「揉の段」になります。これは第二段の千歳舞をまねたもので、終わり近くには「えい、えい、えい」と声をかけて飛び上がる「鳥飛び」と呼ばれる所作もあります。そして、黒式尉の面をかけ鈴を振りながら舞台を回る「鈴の段」になりますが、これは翁舞をまねたものです。「揉の段は種まきを、鈴の段は稲刈りを表す」といった説明もありますが、厳粛と滑稽、陰と陽など相対する概念を融合するところに、平和を願う＜翁＞の意味があるように思います。

このように＜翁＞では足拍子を踏むことが大切な要素になっていますが、それについて思い出されるのが山形県黒川能の「大地踏み」です。黒川能は櫛引町の人々が江戸時代から守り続けてきた芸能ですが、その初めに幼い子供が刀を担げて足拍子を踏みながら舞台を一巡するのです。これは千歳舞と同じく邪気を払い舞台を清めることを、より端的に示していると思います。雪深い里で夜を徹して演じられる黒川能は魅力にあふれており、一度ぜひご覧になることをお勧めします。